

はじめに ～わたしたちの暮らしと景観～

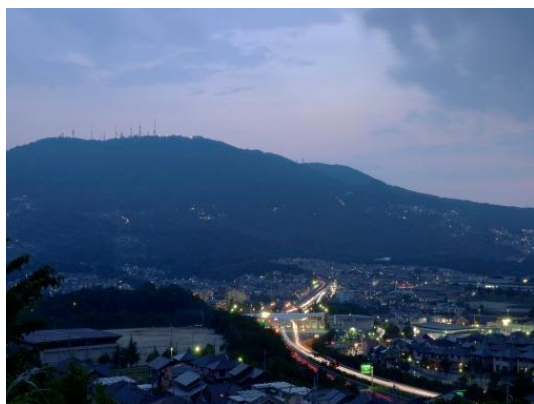
1. 暮らしと景観のつながり

わたしたちの身の回りに目を向けてみてください。

かつて生駒には美しい田園の風景がどこにでも見られました。しかし、農業をする人が少なくなった現在では、北部と南部の集落でしか見られなくなりました。田園の風景は生業としての農業の営みがあるからこそ残されているのであり、何もせずに、この美しい風景が将来にわたって継承されていくとは限りません。

また、最近では幹線道路沿いにいろいろなお店が増えてきました。その背景にはマイカーを利用する人が飛躍的に増えたことがあります。

暮らしが変わることにより風景が変わっていく。つまり、わたしたちの暮らしが目に見える形となって表れたのが「景観」です。良い景観をつくっていくためには、わたしたちの暮らしのあり方をもう一度考え直し、時には変えていかなければならないこともあります。景観の魅力を高めるといことは、わたしたちの暮らしの魅力を高めていくことであるともいえます。



景観は、暮らしが目に見える形となって表れたもの

<景観とは？>

「景観」とよく似た言葉に「風景」や「景色」があります。「景観」は「風景」や「景色」と同じように、自然や市街地の視覚的な眺めを表す言葉ですが、「観」という文字が入っているところがポイントです。「世界観」や「人生観」などの言葉があるように、「観」にはものの見方や考え方という意味があります。つまり、「景観」とは見る人の考え方が反映された眺めということになります。

2. 生駒の景観の成り立ち

本市は、生駒山の麓に位置し、生駒谷の竜田川そして富雄川の流域にあって、谷筋に農地、集落、里山が一体となった田園の景観が広がる地域でした。この生駒に定着していた景観は、長い時間をかけてコミュニティの中で育まれてきたものであり、人の生活と景観が一体として成立していました。

歴史に目を向けてみれば、宝山寺は古くから信仰を集める寺院として栄え、訪れる人をもてなすために門前には旅館やお店などが軒を連ねました。時を経た現在でも、参道筋を中心に昔を偲ばせるまちなみを見ることができ、参詣の文化を映したまちなみ景観といえます。また、生駒山を御神体として祀っていたと考えられる往馬大社は、日本有数の古社であり、本殿は七連の春日造桧皮葺、境内は鎮守の杜に覆われていて、奈良県の天然記念物「社そう」として指定されています。周辺には住宅地が広がっていますが、太古の昔から変わらない自然の森を残すその姿は、自然に対して畏敬の念を抱いていた日本人の心を象徴するような厳かな景観をつくっています。



人の生活と景観が一体となって成り立っている集落景観と田園景観



参道沿いのまちなみ景観

やがて、鉄道が敷設されるとともに、生駒山に象徴される緑豊かなイメージを背景として、沿線部に計画的な住宅地が次々と整備され、都市化が進展してきました。住宅地はその時代の暮らしや社会の様子、建築技術などを反映し、それぞれの時代ごとに特徴あるまちなみを形づくってきました。

一方、行政は、生駒山系や矢田丘陵に代表される緑豊かな自然を保全しながら、良好な住宅地景観を形成していくために、地区計画などのルールを定めて誘導を図ってきました。こうした経緯の中から現在の生駒の景観がつくられてきました。

3. 基本計画を策定する意義

(1) みんなが大切に思う景観を守る

生駒山系や矢田丘陵などの山なみ、竜田川や富雄川などの河川の流域がつくる地勢は、本市の景観の骨格であり、大きな特徴として誰もが認める大切なものです。このため、立場は異なってもみんなが「大切である」という思いを共有しやすいものです。

みんなが大切に思う景観は、適切な保全の枠組みを定め、将来にわたって継承していくことが必要です。本計画では、みんなが大切に思う景観をきちんと守っていくための考え方や道筋を示します。



地勢がつくる生駒の景観の骨格

(2) 多くの人の目に触れる景観の魅力を高める

駅前や幹線道路沿いは多くの人が行き交い、多くの人の目に触れる機会も多いことから、住む人や訪れる人にとって生駒のイメージとなる、いわば「顔」となる場所です。このような場所の景観の魅力を高めることは、生駒全体のイメージアップにつながるため、景観を考える上では非常に重要なことです。

景観は多くの人がかかわり、それぞれの事業や建築行為などが重なり合って形づくられるものであり、目指すべき姿を共有し、お互いに協力しながら実現を目指していくことが重要です。本計画では、多くの人の目に触れる景観の魅力を高めるための考え方や道筋を示します。



顔となる駅前の景観

(3) 暮らしの景観を育む

本市の景観を構成する大部分が、住民が普段の暮らしの中で接する普通の景観（「生活景」）です。歴史、風土、文化などが息づく地域もありますが、特に個性が際立つ地域がたくさんあるわけではありません。そのため良い景観についての思いも人によって様々であり、あるべき将来の景観の姿を共有することが難しいといえます。しかしまちの景観を育んでいくためには、将来のまちのあるべき姿を共有し、その実現をお互いに協力しながら目指していくことが重要です。

まちにかかわる活動を楽しみながら広げていくことで、暮らしがいきいきとなり、良い景観づくりにつながっていく、そんな取組も出てきています。

本計画では、上記のようなことを踏まえて、わたしたちが日常的に接する暮らしの景観を育んでいくためのヒントや道筋を示します。



暮らしの行動が景観を育む

(4) 景観からまちづくりを考える

かつては、コミュニティの中で受け継がれてきた風習や文化が地域に色濃く反映され景観をつくっていましたが、高度経済成長期以降には住宅を商品として購入する時代となり、さらに少子・高齢化や情報社会の進展とともに、空き家・空き地問題やコミュニティの希薄化が全国的な課題となっています。このような状況は住宅都市として発展してきた本市も例外ではなく、同じようなことがまちの中で起こり始めています。

本計画では「つくる」から「守る」「手入れする」ことに時代が変わりつつある中で、見た目だけではなく、住まい手の顔が見えるまちの育て方など、今までとは違った視点でまちの問題について考え、話し合うための一つのきっかけとなるのが景観だと考えています。

わたしたちの暮らしが目に見える形で表れた景観という視点を通して、まちについて考えてみることで、問題解決の糸口が見つかるかもしれません。